

演題名:

哺乳期初期における直接母乳哺乳と人工乳首哺乳の併用について：舌運動の比較検討

齊藤哲¹⁾、石丸あき¹⁾、平田尚子¹⁾、岡野恵里香²⁾、林良寛³⁾

ピジョン中央研究所¹⁾、東京慈恵会医科大学 小児科²⁾、Japan Green Medical Centre³⁾

【目的】

産後早期の直母哺乳と人工乳首哺乳との併用に影響を及ぼしている要因としてミルク穴サイズや口腔内での乳首形態の相違点などが想定される。本研究では乳首形状に着目し、口腔内での乳首形態を詳しく観察し、舌運動や併用率との関連性について検討した。

【方法】

P 社モニター制度に登録し、母乳哺育をしている児 5 名を対象とし（平均在胎週数：39.5 週/平均出生体重：2846 g/観察時平均週齢：7.6 週）、直母および人工乳首哺乳時の口腔内のエコーを行った。人工乳首哺乳は保護者の同意を得た上で行い、搾母乳を児に与えた。使用人工乳首は P 社 S サイズ乳首（旧型）（以下乳首 A）と SS サイズ乳首（新型）（以下乳首 B）の 2 種類で、1)乳首 A は乳頭部がサクランボ形状をしている、2)乳首 B の乳頭部はストレート型で、乳首 A よりも柔らかいシリコーンを使用、という特徴を持つ。

【結果】

エコー映像において乳頭先端部から 5mm、7.5mm、10mm の 3 ポイントにおける乳頭直径を舌運動の指標とし、1frame 単位(30frames/1 秒)で 2 秒間の動作解析を実施した。完全母乳哺乳児 2 例について、舌運動の分析結果を以下に記す。Case1 において、3 ポイント合計の乳首最大圧縮率を算出したところ、直母乳首(49%)、乳首 B(48%)、乳首 A(41%)の順で圧縮率が大きかった。特に 5mm ポイントにおいて、直母乳首は 55%圧縮される一方で乳首 A は 35%の圧縮（乳首 B は 45%）となり、乳首 A の乳頭先端部が圧縮されにくいことが確認された。Case2 においても同様の結果となり、3 ポイント合計で、直母乳首(53%)、乳首 B(50%)、乳首 A(46%)、5mm ポイントにおいて、直母乳首(56%)、乳首 B(49%)、乳首 A(40%)となった。

【考察】

吸啜時、舌は波動状運動をしている。直母哺乳と人工乳首哺乳で舌運動に相違点がある場合、その相違点がどれだけ併用率に影響を及ぼすのか、今後詳しく研究していき、併用を阻害しない乳首形状についてさらなる検討をしていく予定である。